

過疎高齢化する離島のまちづくりと芸術祭

—— 瀬戸内・男木島の再生へ向けた住民の活動 ——

中島正博

Community Regeneration of Aging Society and an Art Festival on a Remote Island

Masahiro NAKASHIMA

Remote islands in Japan have been suffering from aging society and depopulation. The aim of this paper is to describe the efforts for community regeneration of Ogi Island in the Seto Inland Sea and to find unique characteristics of the islanders as a whole. The Setouchi International Art Festival was conducted in 2010 and 2013 in seven remote islands in the Sea. The Ogi Island residents evaluated the Art Festival higher than people from other remote islands, as Ogi people themselves enjoyed hosting so many tourists from all over Japan. In the second Art Festival three young families decided to move to Ogi Island. Young people's immigration has been the first step for the Ogi residents to stop or reduce depopulation. The immigration of the families led to reopening the Ogi primary and secondary schools, closed a few years ago due to lack of students. The second aim of this paper is to find why the Ogi island people succeeded in the first step of community regeneration. Through four years of observation and association with Ogi island people, I found that cultural openness is one key to community regeneration, although it is still in an early stage. The cultural openness was shown by the island's people and their activities before, during, and after the Art Festival.

I. はじめに

II. 芸術祭前の男木島

III. 第1回芸術祭とその後のまちづくり

IV. 第2回芸術祭とその後のまちづくり

V. 離島の将来

VI. 結論

I. はじめに

日本の離島は本土の農山魚村と同様に過疎高齢化している。瀬戸内海の離島も例外ではない。過疎高齢化の流れは確実に進んでおり、例えば瀬戸内国際芸術祭の舞台になった香川県高松市の女木島や男木島の人口は、それぞれ179人と180人である¹。離島では空き家や廃屋が増え続けており、この傾向に変化がなければ集落が消滅する恐れも否定できない。島の人たちはその過疎化にどのように対処しているのだろうか。まずはUターンやIターンの確保である²。そして同時に将来の地域社会像が求められる。過疎高齢化はほぼすべての離島に共通する深刻な課題である³。

地域活性化や地域づくりの一環として、日本の各地で現代アートを利用したイベントが1990年代から行われてきた(橋本1997)。代表的なイベントと

して2000年から3年毎に新潟県妻有地域(十日市、津南町)で「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が開催されている。このイベントは過疎化する農村の地域おこしとして、アーティストの北川フラム氏が企画して始まったものである。

『瀬戸内国際芸術祭2010』(坂井他2011:251)によると、香川県は2003年から「アートツーリズム」を推進する取り組みを始め、2004年に島々を舞台にした国際美術展の開催を知事に提言した。また同時期に直島福武美術館財団から、直島での芸術活動の実績をふまえ瀬戸内の島々をアートで結ぶ「瀬戸内アートネットワーク構想」が発表された。この二つの動きが「瀬戸内国際芸術祭」の源流となった。2008年に瀬戸内国際芸術祭実行委員会が設立され、当時の香川県知事が委員長、福武氏が総合プロデュー

サー、北川氏が総合ディレクターに就任した。

瀬戸内海の7つの離島(内6島は香川県)で2010年の夏から秋にかけて「瀬戸内国際芸術祭」(本稿では芸術祭と略称)が開催された。その芸術祭のテーマは「海の復権」であった。7つの島とは直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島でありすべての島は過疎化している⁴。島々に展示された現代アートの作品の多くは、里山、里海、空き家を中心に展示されたが、恒久的な美術館も造られ芸術祭の一部になった。105日間の芸術祭の間に、94万人の観光客が7つの島々を訪問した。図1に芸術祭の会場になった瀬戸内海の7つの島を示す。

7つの島の中で比較的似た規模の島である、直島、豊島、女木島、男木島の4島を対象にして、芸術祭が離島の再生に果たす可能性を探るために、2011年から2014年にかけて芸術祭に対する島の住民の反応を筆者は調査してきた。調査の方法は4島の住民からの聞き取りである。本稿で論じる男木島については、島の主なキーパーソン⁵に対して、生活・文化、まちづくり、芸術祭によるまちづくりへの効果、などについて話を聞くために、2011年から2014年にかけて、7回にわたり訪問し⁶、多くの住民と会話をかさねた。

芸術祭に対して4つの島の中で男木島住民の満足度が最も高い。例えば「次回も自分の島で芸術祭を開催したい」と、室井ほか(香川大学瀬戸内圏研究センター2012)によるアンケート調査で74%の男

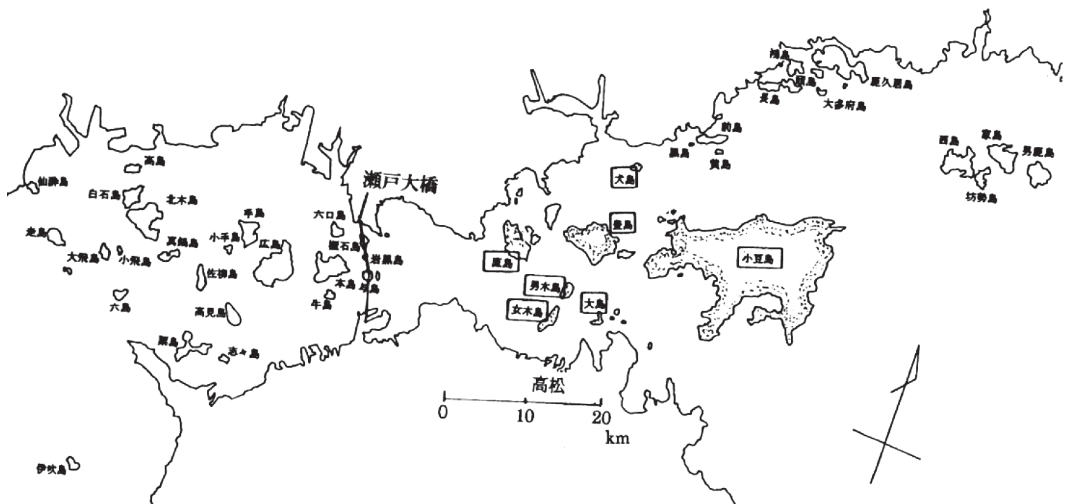
木島住民が芸術祭に肯定的な回答をしたのである。それは過疎化に苦しむ男木島住民自身が、まちづくりの機会と捉えて芸術祭に積極的に対応した成果の表れである。男木島の姿を写真1に示す。島の中腹まで民家が重なり合っており、観光客にはそのような島の姿が魅力的であった。



写真1. 男木島とその集落

2013年には第2回の瀬戸内国際芸術祭が開催された。この芸術祭では第1回の7つの島を含む12の島(新たな5島は香川県)が作品展示の舞台になった。筆者は第1回の芸術祭と同様に4島に限定して、島の住民の対応について聞き取りによる観察を続けた。過疎高齢化という最大の難題に対して、大きな成果をあげたのはやはり男木島であった。

図1. 瀬戸内国際芸術祭が開催された7つの島



出典：岡市 (2009)

男木島の男木小学校は2008年から、男木中学校は2011年に3人の生徒が卒業した後、廃校は免れたが休校になっていた。その男木小中学校が2014年4月から再開することになった。それは3世帯の男木島Uターン者が現れ、彼らの子弟が小中学校に通う必要が生じた結果、男木地区コミュニティ協議会⁷やUターン者の要請に応じて、高松市が小中学校を再開したからである。2014年8月の時点で同校には2人の中学生と4人の小学生が在籍している(男木小中学校ホームページ2014年8月24日)。

芸術祭は島の良さを住民に気づかせる効果があった。その結果、「自分の島に対する愛着が高まった」のである(中島2012:77)⁸。それは島を出て都市に住んでいる男木島出身者にも同様であった。芸術祭が男木島出身者のUターンに繋がったのは、芸術祭が彼らの男木島への愛着を高めたからである。但し、そのような一般的な気持ちだけではなく、個々のUターン者にはそれぞれの考えや家族の事情もある⁹。

少子化や地方の小中学校の閉校や統廃合が続く中で、一旦休校になった学校が再開されることは稀である。再開が実現したのは男木住民のまちづくりの努力が実った結果でもある。本稿ではこのような男木島に限定してまちづくりの力を考察したい。

なお本稿では「まちづくり」という言葉を使用している。その「まちづくり」が含む内容は多岐に亘る。ハードな街並みづくり、ソフトな町の社会の仕組みづくり、さらに経済の活性化なども含まれる。本稿では社会的なソフト面を中心にして、住民の福祉を向上させる社会づくりの営みをまちづくりと呼ぶ。

II. 芸術祭前の男木島

幾つかの男木島の特徴を紹介したい。筆者の聞き取りによると¹⁰、昔から男木島の島民性は開放的なことで知られており、それを示す事実は多い(中島2012)。例えば「島」から連想しがちな閉鎖性とは逆に、島へ来る人を歓迎する気質が強い。具体的には来島者への親切として表れる。それは後述する芸術祭の説明で明らかにする。

この小さな島の住民は、島民が全体として言わば「大きな家族あるいは親戚」のような存在だと言う。海に囲まれた全体が認識できる程度の大きさの島に住めば、人びとに一体感が生まれる。島が小さく利用できる生活資源が限られており、島民が互いに助

け合うことは生活の知恵である。それは家族的な人間関係が生まれるベースになる。男木島住民は共同体意識が強いことでも知られ、それは島の住民が「大きな家族」だからこその特徴であろう。

興味深いのは、男木島の人たちは互いに苗字ではなく名前で呼び合う¹¹。互いに名前で呼ぶために、知り合いでも姓を知らないことがある。一般に家族と生活する時には、名前で呼び合うことを想起させる。

住居にカギを掛けない離島は珍しくなく男木島もそうである。住民同士が家族的な社会で生活すれば、それも自然なこととして理解できる。離島の治安は非常に良く、家にカギなどは必要ないのである。住民の全員が互いに知り合いの島では、このような習慣は自然であるが、現在の本土と比較すれば小規模の離島の文化的な特徴であろう¹²。

この島に生まれた相互扶助の慣習は「コウリョク」と呼ばれている¹³。男木島には平地が非常に少なく、先の写真1のように山の斜面に民家が魚の鱗のように下から上に連なっている。民家より標高の高い所は現在、森¹⁴になっている。山の斜面の集落には写真2のように石段の細い道が迷路のように伸びている。そのような斜面に家を建てる時、たとえば住民が建築用の木材を担いで坂を登り、大工の手伝いをするのは不可欠であった。このような手伝いは、コウリョクの典型的な例であるが、島の人によれば、厳しい地形条件の中で生きるために、必然的に生まれた慣習である。みんなの力が必要な時には、住民が当然のように協力し合う伝統であり、コウリョクは特定の作業や労働に限らない。

この島のそのような特徴は男木島出身で大阪に住んでいた中山(2013)の記述によっても窺うことができる。例えば、「『男木』という小さな空間であるがために強い共同体意識が発達した。男木の先人たちは半農半漁の生活基盤をたえずゆたかにし、あらゆる知恵と工夫で時々の困難を切り開いてきた。そこで育った私たちは、島外の方に言葉ではうまく説明が出来ない。実に”特異”な結びつきがある。」と述べている。

男木島が過疎化してきたのは、農林漁業を軽んじて経済成長を追求し、人口が都市に集中した日本の中で、自然の成り行きであった。戦後、男木島の人口は一時的に増え、最大時には1950年代の約1800人から2000人¹⁵をピークにしてその後減少し

てきた。住民基本台帳登録人口（高松市ホームページ）で確認できる最も昔のものは1974年に684人と記録されている。その後も過疎化は続き2013年は180人である¹⁶。表1は高松市のホームページの統計書に掲載された人口の推移である。同表によれば1980年から2010年の30年間で人口は約350人減少しているが、それ以前の1950年から1980年の30年間の減少人口は1500人程度であり、後者の減少率は非常に高かったことが分かる。高度経済成長期に男木島からも多くの人口が都市に流出したことを示している¹⁷。



写真2. 山の斜面に形成された集落

表1. 高松市男木町の人口推移

西暦年	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
人口	680	551	447	407	349	299	236	202

出典：「統計 高松市の人口」（高松市ホームページ）

このような過疎化の流れの中で、男木島の住民は人口流出を緩和するために、近年まちづくりの努力をしてきた。高松市から近く、観光地の女木島には男木島よりも優先的に高松市が投資するのに対し、男木島は自らの努力でまちづくりに取り組んできた。例えば、島の象徴でもある灯台の周辺に、水仙を海岸から山に向けて約1000メートルにわたり植えたこと、海水浴場の一部にビーチバレーの会場を設置したこと、狭い道路を少しずつ整備してきたこと、島留学を呼び込むための準備を始めたことなどがあつた。これらは芸術祭が始まる前に行われていた¹⁸。

小さな島であるが男木島には5つの神社とひとつ

の寺がある。神社では毎年祭りをするが、高齢化とともに祭りを続けることが難しくなってきた。男木島の人たちだけで祭りをすることが困難になり、高松に住む男木出身者達の応援を求めた。祭り行事は伝統に基づいて既定の日に行われるのが習いである。しかし、高松から応援を求めるとは、職場が休みの週末に祭りを行う必要がある。そのために伝統の規定の日のすべてを週末に変えて、祭りが実施できるようにしたのである¹⁹。写真3は男木出身の高松住民の協力で続けられるようになった祭りの一つ「大祭」である。



写真3. 都市住民の協力で続く男木島の祭り「大祭」

島の過疎化を緩和するために最も力を入れたのはUターンやIターンの推進である。Iターン者には空き家に住んでもらうことが効果的である。しかし空き家を貸す家主が少ないために、適切な空き家を探す努力をしなければならない。また劣化した空き家を住める状態にするには家のリフォームが必要だが、その資金を住民組織で調達することは容易でなく、男木地区コミュニティ協議会は資金の調達に苦労していた。

「男木を捨てるように」島を出て、本土に就職した人たちの多くは、高松や大阪に住み男木島に帰らないが、時には退職後親元にUターンする人たちもいた。それでも島の人口は確実に減り続けたのである。まちづくりの努力にもかかわらず、過疎化に歯止めがかからない。そのような努力を重ねている時に、「瀬戸内国際芸術祭」を2010年に男木島でも行う、という計画が行政（香川県）から提案されたのである。

Ⅲ. 第1回芸術祭とその後のまちづくり

瀬戸内国際芸術祭は島の人たちにとって、あまり馴染のない現代アートの展示イベントである。これまでに急激な過疎化を経験してきた男木島の住民は、一過性のイベントにまちづくりの効果は期待できないことを知っていた。しかし芸術祭が継続的なイベントになれば、男木島がUターンしたい故郷になるよう、今後もさらなるまちづくりが可能であると期待した。そしてUターンしたくなる魅力的な地域づくりのために、この芸術祭を過疎化する島の転機にするべく、それまでのまちづくりのように積極的に取り組むことにした。

具体的には、芸術祭の客を男木島に迎えるために、食事を提供する施設、港の公衆トイレ²⁰、荷物預かり所などを整備したり、アーティストの作品展示のために空き家を提供したりした。アーティストに協力する活動が、島民やボランティア団体の「こえび隊」²¹によって行われた。また当時の連合自治会長は高松市と交渉して、男木の主要なアート作品の一つであり、シンボリックかつ恒久的な施設となる建築「男木島の魂」、通称「交流館」²²を男木港に作ることに成功した。男木島の芸術祭には14の作家あるいはグループによる作品が展示された。写真4に示すのは上述の作品「男木島の魂」である。



写真4. アート作品「男木島の魂」であり恒久施設の「交流館」

芸術祭が始まると、男木の歴史が始まって以来の多人数で、「島が沈む」のではと思わせるくらいの観光客がきた。先に男木の島民性について触れたが、島に来る人びとを歓迎する開放的な島民は、島を訪問する芸術祭の観光客に大いに喜ばれた²³。住民には一人や二人で暮らす高齢者世帯が多い。家にこ

もっていけば身体的には楽である。しかし家の外に出て、島に来る客に應對し交流をすることに、楽しさを見出したのである。連合自治会長や島民に対する筆者の聞き取りによると、島外の人との交流を通して島民自身が「人間的に変わった」と感じたのである²⁴。

芸術祭後に住民同士が交流する機会が増えたことにも、島の人の意識の変化が反映されていると思われる。例えば漁協の施設を利用したビアガーデンでは島民や島外の人びとの交流も広がった²⁵。さらに島の体育館で高松住民との交流、男木島周辺の島々の人との交流、島の高齢女性も含めたファッションショーの開催、「男木 de あそび隊」²⁶というグループの活動、男木島・女木島を舞台にした大茶会（500人限定）などが行われ、「交流の文化」が広がったと言えるだろう。

芸術祭での交流として、観光客に対する道案内を含む会話や接待などのサービスの他に、多くの経済的な活動も営まれ、その結果男木にも経済効果が生まれた。芸術祭の期間中に旅館と民宿は町に一つずつ存在していた。飲食業もいくつか存在していた。さらに飲食の販売所や有料の荷物預かり所などを男木地区コミュニティ協議会が運営したため、男木の住民組織の財政も潤った。まちづくりを担う同協議会の財政は、Uターン者を迎える空き家のリフォーム資金などの経済的な基礎であり、芸術祭は過疎化する男木が再生する経済力を高めたのである。

芸術祭を経て住民が「人間的に変わった」のに対して、芸術祭の後、地域社会に残念ながらネガティブな変化が起きた。それは先述のコウリョクと呼ばれる住民の相互扶助の変化である。例えば、まちの草取りはコウリョクの一つとして、昔から無償のボランティア活動で行われてきた。島の山の中腹を一周する周遊道の草取りも、重労働ではあるがボランティアのコウリョクであった。ところが芸術祭により男木コミュニティ協議会の財政に余裕が生まれたことが契機で、このような島の維持活動に同協議会からお金で謝礼が支払われるようになった²⁷。その影響で、お金が支払われなければまちの維持活動に参加しない、あるいは労賃を期待する島民が現れたのである。相互扶助が衰退した本土ではあり得るが、コウリョクが盛んであった男木にとって大きな変化である²⁸。

賃金を支払うことは貨幣経済が普及した今の時代

の一般的な流れであろう。しかし自助・共助・公助の社会を築こうとする日本において、共助がさらに衰退するのは時代の必要に逆行する。共助の模範ともいえる男木島で、共助が逆に衰退するのは皮肉である。すべてのまちづくり活動に無償のボランティアで参加することは、今の時代には容易ではないだろう。無償と有償のボランティア活動の仕分けが、男木で必要になりつつあるのかもしれない。近代化の過程で共助が衰退した社会に、共助の仕組みを再生するのは容易ではないが、日本社会全体の課題である。

瀬戸内海の離島で第1回の芸術祭が終了した後、越後妻有の「大地の芸術祭」のようなトリエンナーレの形で、芸術祭が継続的に実施されることが期待されていた。そして第2回の瀬戸内国際芸術祭が開催される旨、『瀬戸内国際芸術祭2013 実施計画』（瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2012）が発表された²⁹。2010年に男木に民宿が開業したことは、芸術祭の継続実施に備えた住民の期待の表れである³⁰。後述するまちづくりの努力にも芸術祭継続の期待が込められていた。

男木のまちづくりの最大の目標はUターンやIターンをする人々を確保して、人口減を少しでも緩和することである。しかし男木島にUターンする人やIターンする人が従事できる産業や生業がなければ、過疎化は進む一方であり過疎化を止める手段もない。産業や生業という生活手段を維持・創造するためには、ある程度の人口規模が必要である。従って過疎化を緩和するために最も求められるのが、Uターン者でありIターン者である。さらに観光客と交流する住民がいなければ芸術祭の意味がなくなる。島の人口が減って集落の形を成さなくなったら文化も消滅する。地域の文化こそが観光の魅力なので観光も衰退する³¹。

Uターン者やIターン者を増やすと同時に、彼らが従事する経済活動が必要である。男木島が過疎化してきた多くの耕作放棄地を再生・保全する活動が、男木地区コミュニティ協議会の主導で2012年から2013年の冬にかけて1年間実施された。写真5に示すのは男木島の中腹に整備された周遊道から見た段々畑であるが草木に覆われている。長年放置された農地の草刈り、雑木の除去は「開墾」と同様であり、継続して行わなければならない。男木の最大の資源は海と山の自然である。耕作放棄地を使っ

た観光農園や観光漁業なども住民によって構想されている。このような経済基盤の再生は男木の過疎化対策、定住対策として不可欠であろう。



写真5 耕作放棄された畑

最初の芸術祭では一人のIターン希望者が現れた。定年が間近になった大阪に住む教員が、定年後に男木島に移住するという話を筆者は伝え聞いた³²。男木島の人や自然に魅力を感じたのであろう。わずか一人の移住希望者の出現ではあるが、今後に希望を感じさせる朗報だったようで、男木の住民から度々それを耳にした。

IV. 第2回芸術祭とその後のまちづくり

第2回の瀬戸内国際芸術祭は第1回の経験³³に学び、2013年3月20日から4月24日までの春会期、同年7月20日から9月1日までの夏会期、同年10月5日から11月4日までの秋会期に分けて実施された。また芸術祭の会場も7つの島から12の島に広がった。新たに加わった5つの島は、高松の西に位置する本島、沙弥島、高見島、粟島、伊吹島である。第2回の芸術祭のテーマは第1回と同様に「海の復権」である。

第2回の芸術祭では新旧合わせて15人の作家と1つのグループが男木島での作品展示に参加した。男木の漁師の船に絵を施す住民参加の作品も見られた。第1回の芸術祭では、男木島の作品の主役は現在「交流館」として使用されている建築「男木の魂」であった。しかし、男木住民の評価によると、第2回の芸術祭の男木島には、主役になるような大作はなかった³⁴。

芸術祭の期間中、男木港周辺には男木の島民性が

表れていた。男木住民と観光客の交流が男木の港ですぐに始まった。例えば男木の港周辺では住民が飲食の販売をしていた。女木島の港では「鬼の館」と呼ばれる船の待合施設で飲食の提供が行われている。観光客を相手に即席のビジネスを営む男木と、公的施設に任せる女木の島民性の違いは対照的である。女木島の港周辺に住民はあまり見かけない。女木では観光協会が中心になって観光客に対応しているが、男木では観光協会があまり機能していない。男木ではコミュニティ協議会を構成する老人会や自治会などの住民団体が分担して、食事も含めて観光客に対応した。飲食店を営む人たちは店を構えているが、住民団体は港にテーブルとテントを設置して簡単な食事を提供した³⁵。写真6は男木港の付近で行われた住民団体による飲食販売の様子である。漁師は生けすに入れた魚を販売していた。また「男木・島テーブル」という施設が設置され、地元の住民が持ち寄った農作物や海産物を販売して、来島者との交流が促進された。このように港周辺に多くの住民がいるので、作品展示場への道案内もできるし、観光客と住民の交流も自然に気軽に行われた。



写真6 男木港周辺の賑わい

結果的に大きな経済効果も生まれ、それは最初の芸術祭を上回った。上述のような各々の住民や住民団体による販売活動に加えて、第2回では民宿が1つ増えて、民泊³⁶の施設が3つできた。さらに飲食店も増えている。空き家も積極的に利用され、アーティストやこえび隊の住居にもなった。第1回の芸術祭を契機に定年後のUターンを希望した大阪の元教員もすでに空き家に住んでいる。リフォームがさらに必要だが、空き家の利用もこのように少しずつ進んでいる。

男木のお年寄りは第1回の芸術祭の時よりも多く参加した。お爺さんもお婆さんも一日に一度は港に出てきて、観光客と交流をして元気をもらう。第1回から芸術祭の大切な目的は「島のお年寄りに笑顔を取り戻す」³⁷ことである。それがすべての島で実現できたかどうかは一概に言えないが、男木では島のお年寄りにも交流が喜ばれた。芸術祭後にもお年寄りは外出に積極的になっている。昔から不定期の「おんば市場」があったが、今は日曜の市場になり、多くの住民が家から出て、坂道を降りて来て集まるので、港の周辺が賑やかになった。

第1回の芸術祭で男木島を訪問した観光客は、『瀬戸内国際芸術祭2010 作品記録集』（坂井他2011）によれば約9万6千人であった。芸術祭の会場は7島から12島に広がり、会期も春・夏・秋に広がった結果、第2回に男木島を訪問した観光客は、『瀬戸内国際芸術祭2013 総括報告』（瀬戸内国際芸術祭実行委員会2013）によれば約5万人である³⁸。因みにすべての島や会場の総観光客は、第1回で94万人、第2回で107万人である³⁹。

第2回の芸術祭で特筆すべき事実は、まちづくりの最初の段階の目標であるUターンを希望する家族が現れたことである。さらに、それに伴ってまちの文化の要になる男木小中学校の再開が2013年10月に決定したのである。定年退職者のUターンやIターンはこれまでも時にあったが、子供が伴わないために学校の再開にはつながらなかった。また年金生活者であるから島の産業づくりにも直接つながらなかった。Uターン希望者は高松市在住の3世帯の若い家族⁴⁰であり、島の産業興しの力になる可能性がある。2014年8月の時点では男木小中学校には6人の生徒が在籍している⁴¹。但し、古い校舎は耐震などの問題があるために、プレハブの仮設校舎が港のすぐ近くに建設されて授業に使用されている。

第2回の芸術祭後にも、新たなまちづくりの努力が行われている。例えば島コンである。島コンは男木島が好きな人たちが、農業体験、漁業体験、郷土料理などを通して、男木で島生活を楽しむ企画である。男木地区コミュニティ協議会や飲食組合の主催である。主催関係者によると第1回の島コンは十数人、2回目は3、4人であった。このような企画が発展すれば、観光農園や観光漁業の構想も島の産業として実現する可能性がある。都市住民の意識は変化しており、例えば実際に魚をどのようにして獲る

のか見たい、という若者が男木島に来ることもある。

第1回の芸術祭の前にまちづくりの一環として植えた灯台周辺の水仙も男木の観光資源になっている。「水仙ウォーク」と名付けて、水仙が咲いた約1000メートルの道を2月から3月にかけて歩いて楽しむイベントである。2014年2月の週末の水仙ウォークには島外から600人程度が参加した。さらに週末だけでなく平日にも観光客が男木に来るようになっている。「男木 de 遊び隊」⁴²の情報発信（フェイスブック）によると、2014年の夏には港の交流館や海水浴場でライブ演奏が行われている。このように男木で交流活動が活発化し、以前より多くの観光客が訪れるようになったのは、芸術祭を通して男木島の存在が知られ、男木島に魅力を発見した人たちが増えたからである。

V. 離島の将来

男木島で今後もまちづくりを続けるに際して、将来的に目指すビジョンが必要であろう。芸術祭は香川県の政策で実施されており、将来、県知事が替っても芸術祭が継続されるという保障はない。従って芸術祭の集客効果や経済効果に、男木島の将来が過度に依存するのはリスクがあり、賢明ではないだろう。島の住民はそのことを十分認識しているが、男木島の将来像について島民の間で一致したビジョンがある訳でもない。しかし海と山の自然が男木島のかげがえのない資源であることは島民の共通した認識である。

移住希望者は3家族のUターン者以外にもおり、若者を島に受け入れるための住居（空き家）を用意し、生活ができる収入源をつくり出さなければならない。生業となる経済活動やそのアイデアづくりに、島の人たちは知恵を絞っている。住民は地域づくりをするべくそれぞれ活動をしている。例えば、男木の特徴のある味噌づくり、ハーブ農園を増やす活動などが行われているし、その他に島の自然資源を活かした特産品開発のアイデアも多数ある⁴³。また芸術祭の前に構想していた島留学に向けて、特徴のある学校づくりの経営方針も定められている⁴⁴。それぞれの活動やアイデアがまちづくりの相乗効果を生むように、住民たちの間で話し合いを重ねることが必要である。高齢者の福祉を推進することも必要である。生活の質を高めるために、高齢者のサロン、

学びの教室、交流を促進する談話の場などが計画⁴⁵されている。これは男木に限らず、高齢化社会を迎える日本のどこでも必要な課題である。

離島の将来を考える上で示唆を与えるものはないだろうか。日本全体として都市化の大きな傾向は変わらないものの、近年、都市から農村へ移住して就農する人たちが増えていることに注目したい。そのような動向の中で過疎に悩む地方の自治体は、都市住民の地方への移住を促進するために、空き家提供などの支援策を講じている。また総務省は人口減少や高齢化の進行が著しい地方に、田舎暮らしの意欲がある若者を「地域おこし協力隊」として派遣している。男木ではすでに芸術祭のボランティア団体の「こえび隊」や一般市民による「男木 de 遊び隊」など、男木の応援者達が地域おこし協力隊の役割を部分的に演じている。彼らの存在は男木にとって心強い。

まちづくりで良く知られた離島の事例は島根県沖ノ島諸島の海士町である。海士町の人口は2331人（2012年）であり、UターンとIターンの人口が島の全人口の20%を占めている。海士町での生活体験や起業などの活動は『僕たちは島で、未来を見ることにした』（阿部・信岡2012）に綴られている⁴⁶。また瀬戸内海で3番目に大きい島である周防大島町の近くに位置する柳井市の離島の平群島（人口390人）では、2003年に休校した学校がIターン者の子供の入学により2012年に再開され、さらなるIターン者の流入により2014年には島の子供の数が3人から6人に増加したことが報じられている『中国新聞』（2014年4月9日）。

日本の過疎高齢化の傾向と予測にも拘らず、一部地域ではこのようなUターンやIターンの動向があり、日本の近代化以降長く続いた向都離村一辺倒の傾向に小さな変化が起きている。まちづくりに熱心に取り組む地域に限られるかも知れないが、離島や農村の過疎高齢化現象に変化が生まれている。離島の将来を予測するのは難しいが、住民のまちづくりに加えて、田舎暮らしや自然志向の移住や定住がさらに進むなら、離島のこれまでの過疎高齢化に変化が生じて、持続的な生活の場として離島再生の可能性があるのでないだろうか。

VI. 結論

日本の離島は高齢化と過疎化に苦しんでいる。本

稿では過疎化する瀬戸内海の離島、男木島の住民によるまちづくりの活動を紹介し活性化の要因を考察した。瀬戸内国際芸術祭が2010年と2013年に瀬戸内の離島で実施された。2010年に実施された芸術祭の7つの島の中では、住民から見た芸術祭の評価は男木島が最も高かった。そして2013年の芸術祭では、過疎高齢化を緩和するために住民が最も望んでいた、若い家族のUターンが実現した。その結果、男木小中学校の再開が実現した。学校の再開は男木島のまちづくりの効果が目に見えて表れ始めた段階として重要である。島の過疎化が緩和される希望が少し見えてきたからである。そのような男木住民のまちづくりの力はどこから生まれるのだろうか、4年間に亘る男木住民への聞き取り調査を通して探った。

男木住民は芸術祭以前からまちづくりの努力を続けていた。住民がまちづくりに励んできた直接の契機は、止まらない過疎高齢化に対する危機感である。生徒の不在により小中学校が休校になり、住民の高齢化で祭りの存続も危ぶまれたことは、その危機感が最も高まった男木の現実であった。過疎高齢化の危機感も多く島の共有しているものの、それは必ずしもまちづくりの努力とその成果につながっていなかった。

男木島ではどのような要因がまちづくりの成果を生んでいるのだろうか。住民からの聞き取りに基づき、男木住民に伝統的に備わった文化的な「開放性」がその要因であると筆者は考えている。生活のための助け合いが慣習になったコウリョクの伝統も開放的な人間関係に支えられてきた。高齢化により男木住民のマンパワーだけでは足りなくなり、高松の市民の力を借りて、祭りなどの伝統を維持し交流を続けてきた。島外の人びととの「交流」に表れる開拓精神も開放性の表れであろう。まちづくりに向けて男木の住民が「団結」できるのも、住民同士の言わば家族的な人間関係が基礎にあるのだろう。

芸術祭で島のお爺さんお婆さんが、観光客との「交流」を楽しんだのも開放性の表れである。都市の観光客もそのような交流を楽しみ、交流の文化に癒され、そして男木島の人氣が観光客の間で高まった。このような文化力を基に、第1回の芸術祭では前代未聞の「島が沈む」ほど多数の観光客を迎え、第2回の芸術祭では多過ぎず適切な規模の観光客を迎えて、まちづくりの資金として必要な経済的効果も得

ることができた⁴⁷。芸術祭が本土の不特定多数の人びとに男木島の魅力を気づかせ、さらに「こえび隊」や「男木 de 遊び隊」などの特定の人びとが男木のまちづくりの応援者になったのである。彼らは芸術祭が開催されていない時にも、男木のまちづくりを応援しており、今後の男木島再生の力になる大切な存在である。

謝辞

本研究を実施するに際して男木島住民の皆様から多くのことを学びました。特に第1回と第2回の芸術祭が開催された時期の2代に亘る連合自治会の会長からは、何度もお話を伺う機会を頂きました。筆者を招待し住民との座談会を開いて下さった「男木の歴史と未来を考える会」、ボランティアの「こえび隊」の方々、男木島で活動されているアーティスト、また男木の文化・社会について快く語って下さった住民の皆様深く感謝します。

本研究は平成23年度から平成26年度にわたる科学研究補助金基盤研究C（課題名「瀬戸内芸術祭の外発的インパクトと内発的発展：文化・社会・経済面からの持続的検証」課題番号23530675）による研究成果公表の一部です。記して感謝します。

注

- 2013年10月1日の住民基本台帳による。前年からの減少は女木で7人、男木で10人である。それぞれの面積は、女木島は2.67km²、男木島は1.37km²である。また高齢化率は共に60%を超えている。ある大学の学生の調査によれば、男木島の7割が空き家、廃屋は1割、常に島に住んでいる人は120人位との情報もある。
- 島から流出せず島に定着することが理想であるが、若い人にとって魅力的な産業がない現在、それは容易ではない。
- 離島で起きている深刻な高齢化の現象は、少子高齢化している日本社会全体がいずれ直面する。現在過疎高齢化と闘っている離島の状況は、本土の地域にとって他人事ではなく先例であり、今後どのような地域社会を築くのか構想するために、離島の経験から学ぶべきではないだろうか。
- 7つの島の他に、これらの島々へ向かう船の港である岡山県の宇野と香川県の高松にも作品が展示された。

- 5 連合自治会長（～2011年3月）、連合自治会長（～2014年3月）、前男木コミュニティセンター長（～2013年）、男木の歴史と未来を考える会副会長（コミュニティ協議会役員、僧侶）、連合自治会書記・会計（生活改善委員、ハーブコーディネーター）、男木コミュニティセンター副会長、民宿の経営者、その他の住民の方々である。
- 6 第1回の男木島訪問は2011年8月14日、2回目は2012年8月4日～5日、第3回目は2013年4月21日、第4回目は同年7月14日、第5回目は同年8月16日～17日、第6回目は2014年3月9日、第7回目は同年8月30日である。
- 7 男木地区コミュニティ協議会は男木自治会、老人会、婦人会など、男木の住民団体が構成されまちづくりを推進している。
- 8 芸術祭において実施されるアートプロジェクトでは、作品を設置する場所に相応しい「サイトスペシフィック」な作品が求められるので、作品を見る人にその土地の良さを気づかせる効果が期待できる。
- 9 例えば母親の世話をしたいUターン者もいる。
- 10 第1回の芸術祭とそれ以前の時期に10年間男木島の連合自治会長を務めた。
- 11 本土から男木島に嫁いで、自分の親以外の他人から、初めて姓ではなく名前と呼ばれて驚いたことなどを、筆者に語った住民の話に興味深く聞いた。
- 12 昔の農村でも家にカギは掛けなかったが、今となっては離島の特徴であろう。離島では治安に関する安心感が強い。筆者は尾道市の唯一の離島である百島の調査もしたが、本土の尾道と百島に橋をかけるアイデアに反対する気持ちをもつ百島住民は少なくない。本土の文化から見れば橋は「便利」なものであるが、島の文化では便利志向が優先するとは限らない。便利な橋によって危険も呼び込み、島にとって大切な安心が損なわれるのである。そのような「便利」の功罪は現代文明の特徴である。
- 13 「コウリョク」の語源を島の人には明確には知らないが、「きょうりよく（協力）」の発音が変化したのではないかと想像する島民が多い。男木島から最も近く船で20分の距離にある女木島の高齢の複数の住民は「コウリョク」の言葉も知らなかった。
- 14 現在は森であるが、かつては畑であったことが分かる。段々畑の石垣が残っており、元の畑は森林化しつつある。人口の流出と共に耕作が放棄されたのである。
- 15 人口規模のピークはキーインフォームントによる。「男木小中学校の歩み」（男木小中学校ホームページ）によれば1956年に小学生178名、中学生79名と記録されている。
- 16 住民登録上の人口であり実態とは異なる。島と四国側の両方に居住する人びと、本土で子供と住む人びと、病院や老人ホームなどに滞在する人びとなど種々のケースがあり、実際には島の居住人口はさらに少ない。
- 17 聞き取りによると、男木の島から出て、都市で成功する人が尊ばれて、男木に残る人は「消極的な人」と見なされるような風潮が過去にあった。これは別の芸術祭会場の豊島における聞き取りでも同様であった。そして都市で活躍した人々の逸話が島で語り伝えられるのである。程度に差はあるが本土でも同様の傾向はあっただろう。
- 18 この他、町民運動会、老人会によるお墓掃除、誕生会やカラオケなど多数ある。
- 19 このような柔軟性には男木島の島民性（開放性）が表れている。逆に男木島の近くに位置する女木島の祭りでは、対照的にしきたりが厳格に守られる。
- 20 このトイレのような公共的な施設は高松市の財政でつくられた。
- 21 芸術作品の設置の準備や管理をする、若い人からなるNPO法人のボランティア組織である。第1回の芸術祭から活動を始めて、2012年9月時点の登録メンバーは3000人を超えるが、実働人員は200～300人である。主に芸術祭の作品展示会場で活動している。このNPO法人の理事長は北川フラム氏である。
- 22 作家ジャウメ・プレンサによる「男木島の魂」と呼ばれる半透明の建築作品。現在は「交流館」と呼ばれて、男木のイベントにも使用されている。
- 23 後の調査によると7つの島の中では、男木島における観光客と島民の交流が最も盛んであった。
- 24 もともと開放的な島民性であるが、見知らぬ島外者であっても人との「交流」を楽しむ、という生き方に係るものであり、それは「生の質」の向上であると筆者は考える。
- 25 漁船ではライフジャケットの着用が義務付けられている。ライフジャケットを着用しなかったために命を落とした漁師は多く、残された家族の苦しみを知っている漁協婦人部が、ライフジャケット着用キャンペーンの場としてピアガーデンを利用した。ピアガーデンには地元や近隣の島の漁師も来るので、ライフジャケット着用を彼らに呼びかけている。
- 26 男木島が好きなお人（男木ファンと自称）が集まって島の人たちと交流をする。島のイノシシから作物や人を守

- るために、島に柵を設置するなどの活動もしている。
- 27 それは芸術祭を通して貢献した島民に報いようとす
る、連合自治会役員の判断であった。
- 28 男木のまちづくり資金が流出することや、コウリヨク
の伝統にそぐわないこととして、謝礼や賃金の支払いに
反対する声がある。今の男木社会にある。
- 29 日本語名は「瀬戸内国際芸術祭2013」であるが、英語
名は“Setouchi Triennale 2013”としており、将来的に3年
毎の開催を計画したと思われる。2014年に発行された作
品集のカタログ『瀬戸内国際芸術祭2013』の英語名は同
様に“Setouchi Triennale 2013”である。
- 30 2010年の芸術祭の時に民宿が一つできた。その後、旅
館が一つと民宿が二つある。2013年の芸術祭開始時には
民泊が3つできた。
- 31 文化の多様性は人類の価値である。例えば男木島の
コウリヨクは文化的な価値であり、いわば「文化的遺伝
子」である。その価値が消滅してしまったら、人の生活
を豊かにする「遺伝子」を失うことにつながる。芸術祭
以外の観光資源は海と山からなる自然であり、その自然
の上に島の文化が生成したのである。
- 32 教員は定年後に男木島の空き家へ実際に移住した。
- 33 最初の芸術祭では、全体で94万人に及ぶ多くの観光客
によって、住民の日常生活が大きく乱されたことが最大
の教訓であった。しかも会期が終わりに近づくにつれて
混雑がひどくなったので、第2回の芸術祭では春・夏・秋
の3回に分けて中休みを入れれば、観光客がある程度分
散し平均化されて、地元住民の負担が軽くなると期待し
たのであろう。
- 34 主役になるような良い作品がなかった理由として、第
1回の芸術祭で得た男木島の良い評判を利用し鑑賞者を
獲得する意図で、男木に作品を展示したのではないか、
との印象をもつ男木の住民が多い。
- 35 住民団体が飲食を観光客に提供すると、飲食業を生
業とする観光業者の収入が減少する。結果的に飲食業を
生業にする経済活動の支障になり、島の観光産業の成長
を阻害するので、島の産業の発展と矛盾しかねない。他
方、住民団体による経済活動は空き家改修などまちづく
りの資金にもなる。観光産業と住民団体による食事提供
について、両者の間で何らかの取り決めが今後必要にな
るだろう。ここで住民団体とは老人会や自治会などであり、
その収入はまちづくり団体である男木コミュニティ協
議会の収入になる。
- 36 その後、2014年8月末時点における民泊施設は4箇所
になった。
- 37 総合プロデューサーの福武総一郎氏（ベネッセホール
ディングス会長）が芸術祭の最大の目的として常に主張
している考えである。
- 38 第1回の観光客の人数は小さな男木島に対して多過ぎ
た。『瀬戸内国際芸術祭2013 総括報告』では、前回の
ように多過ぎず適切な規模の観光客であったと評価して
いる。第1回より減った理由は分析されていないが、第1
回の7島から第2回の12島に観光客が分散したことが挙げ
られる。また第2回の作品の魅力が低下したことは島民
の認めるところである。以上の二つの要因は男木島の訪
問客が減少した理由だろう。
- 39 瀬戸内国際芸術祭の知名度が上がったことや、第2回
芸術祭では会場が12島に増加したことなどが、全体の観
光客が増えた理由であろう。
- 40 3世帯のUターン者の職業はIT、漁師、無職であ
る。
- 41 高松から男木に転校してくる女子小学生は、自分が中
学生になるまでに学校の生徒を10人以上にしたい、と筆
者に語っていた。Uターン者がU・Iターン者と呼ぶこ
とがあるかもしれない。
- 42 男木島が大好きな人が集まって、島の人たちと一緒に
何かをしたい、という言わば「男木ファン」からなるイン
フォーマルなグループである。
- 43 特産品にする農作物の栽培が必要であるが、男木島に
は300~400頭のイノシシがおり、イノシシの獣害対策が
当面の課題である。イノシシが食べる作物は作られない
のが現状である。近隣の島もすべてイノシシ対策に困っ
ている。
- 44 都市の環境に適応しにくい子供を受け入れて、豊かな
自然に触れさせることが男木の島留学の基本的な発想で
ある。男木小中学校の学校経営の重点として、「豊かな
自然や人とのふれあい」、「へき地小規模校の特性を生
かし、指導の個別化と集団化の工夫」などを重視する旨
が述べられている。
- 45 連合自治会長からの聞き取りによる。
- 46 2013年7月14日に筆者が招かれた島民の座談会「みん
なで男木のことを話そうよ」（主催：「男木の歴史と未
来を考える会」）において、筆者は海士町の事例を紹介
した。海士町の紹介は男木の住民に一定のインパクトを
及ぼしたようである。
- 47 この場合、経済活動の結果として男木の文化が発展し
たのではなく、男木の文化力の結果として経済効果が得
られた点が示唆的である。

参考文献

- 安部裕志・信岡良亮. 2013. 『僕たちは島で、未来を見ることにした』木楽舎.
- 岡市友利. 2009. 「海と島の復権にむけて－瀬戸内国際芸術祭とさぬきの島々（1）」『瀬戸内海』（56）27-30.
- 香川大学瀬戸内圏センター. 2012. 『瀬戸内海観光と国際芸術祭』美巧社.
- 坂井基樹他. 2011. 『瀬戸内国際芸術祭2010 作品記録集』美術出版社.
- 坂井基樹他. 2014. 『瀬戸内国際芸術祭2013』美術出版社.
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会. 2012. 『瀬戸内国際芸術祭2013 実施計画』.
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会. 2013. 『瀬戸内国際芸術祭2013 総括報告書』.
- 中国新聞. 2014. 「子供倍増 笑顔の離島」（2014年4月9日）.
- 中島正博. 2012. 「過疎高齢化社会における瀬戸内国際芸術祭と地域づくり」『広島国際研究』（13）71－89.
- 中山克重. 2013. 『克重ばなし 男木島の歴史をたずねて』男木の歴史と未来を考える会. 美巧社.
- 永峰美佳他. 2010. 『瀬戸内国際芸術祭2010公式ガイドブック』美術出版社.
- 永峰美佳他. 2013. 『瀬戸内国際芸術祭2013公式ガイドブック』美術出版社.

URL：

- 『離島経済新聞』：<http://ritohei.com/contents/2014/03/04/kanritokei-001/>
- 「統計 高松市の人口」：<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/973.html>
- 男木小中学校ホームページ：<http://www.edu-tens.net/syoHP/ogisyouHP/>